

和訓栞の序文「栞文播旨書＝本居宣長筆」の勉強会について

(平成17年8月3日、センターパレス2Fにて) 塚澤 洋

谷川士清の「和訓栞」の「序=栞文播旨書」は本居宣長が書いたものです。この序を自分たちで解釈してみようと試み、勉強会の題材としました。この序の宣長自筆のものは、大正11年には、東京の三村竹清（本名清三郎[1876-1953]、津出身の江戸文化研究家）が所有していたことが、同氏から第16代川喜田久太夫宛の手紙に書かれています。しかし、同直筆の現在の所在は不明となっています。資料としては、活字本の「和訓栞」の序のコピーを使用しました。

勉強方法としては、「栞文播旨書」の言葉の一つ一つの意味を辞書「広辞苑」で引いて書き出し、そのつながりによって文章の意味を理解していくというものです。全体に祝詞で使われるような大和言葉（日本の雅言、主に平安時代以前の語）で書かれており、枕詞などによる幾重にも連なった言葉の修飾と、それらが生み出す言葉の響きによって、文章に莊重な感じを与えています。

辞書を引いていくにつれて、「栞文播旨書」の言葉のほとんどが「広辞苑」に記載されていることが分かり、宣長は典型的な大和言葉によってこの序文を書いたことを知りました。

内容としては、まず莊重な言葉の連なりによって「天孫降臨」の有様を記述し、天孫を伊勢の地に導いた神「猿田彦」の功績を称えています。さらに、「猿田彦」の鎮座する伊勢の地から谷川士清に話を移し、絶えることなく流れる谷川の流れにたとえて、彼が日本古来の言葉を一心に研究したことを褒め称えています。

この序を読んで、特に新しい事実が分かったということはありませんが、本居宣長の文章の巧みさや、大和言葉などに対する知識の深さなどから、彼の才能を改めて知るとともに、本居宣長の和訓栞に対する評価の高さや、士清に対する友情の深さを感じることができました。

(筆者は事務局長・研究部会所属)

>>>

「和訓栞」凡例の口語訳を通して

(平成17年9月7日、同所2Fにて) 佐野萬里子

凡例は、言葉の辞典としての内容と使い方、趣旨を示して、利用者の便に資するものであるが、ここには、士清のこの書に対する意気込みまで読みとれるように思われる。記述内容に従って一部紹介しよう。

*我が国では、古来漢語・漢字を真名とし主として、字（仮名）を従属的なもの、末なるものとしてきた。「されば」日本書紀・古事記・万葉集などの文字はいろいろな書き方がされている。「その中にまた意義をこめたるもあたりけり」。だから、この書も仮名を以て標出（見出し語を書き出）し、正字を以て訓詁（字句の解釈）をする。和訓栞の名のゆえんである。

*「この書五十音をもて次第し、後のいうえを省きぬれば四十七條を立たり。各條の下もまた五十の序でによれり」。これこそこの和訓栞の特徴で、従来のいろは順に代わってこの五十音順に並べた識見は、日本書紀通証卷一の付録として掲載した「和語通音」（動詞の活用表）からのものであろう。言葉のカードをおそらく五十音順に整理していたのではなかろうか。

ワ行の「う」はア行と同じ、ヤ行の「い」「え」はア行と同じ字なので、実質四十七条を立てていることを断っている。ただ、士清は当時ア行の「オ」を定家仮名遣いに倣って「ヲ」としており、また、五十音順も第二字目までとなっている点、後には訂正されていく。《ア行のオ段の字を「オ」とし、ワ行を「ヲ」とすべきだと指摘したのは、他ならぬ本居宣長だった（「字音仮名用格」宣長著）。》

*「この書仮字つかひを本とし訓義を解り」。だから、仮名遣いが一旦間違うとそのことばの意味もまた誤る。そのうえで、訓義（=ことばの意味）を明らかにして、仮名の区別も味わってください、とある。また、「仮字つかひは古事記・日本紀・万葉集・倭名抄・新撰字鏡等の古書に本つきて後世の一家の私論を拠とせず」。このような古典の用例や先行の辞書類を重んじる態度には、学究としての士清の毅然たる姿勢が見られる。

この辞典の編集方針としては、雅語だけでなく俗語や当時の外来語（漢語・韓語・梵語・蛮語）まで、そして自立語だけでなく助詞や助動詞、発語まで分類して集めている。

更にこの書と「通証」とで齟齬（=違い）があった場合は、「この書をもて定説とす」と言明して研究成果に自信を示し、最後に簡帙（かんちつ）を重んじるため三編とし、古語雅語の解釈を主にした前編を刊行するとして終わっている。編集終了は安永4（1775）年、亡くなる前年だった。